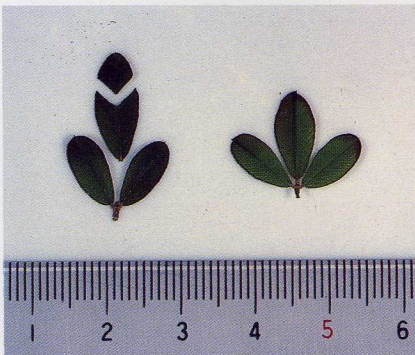


文・中坪孝之(総合科学部)
写真 Nakatsubo, Takayuki



ヤハズソウ (マメ科)

Kummerowia striata



葉の先をちぎったところ 矢筈草の名の由来



根の中のVA菌根菌(青く染まっている部分)



植え込みに生えたヤハズソウと花

めつたに見られないのに有名な植物もあれば、たくさんあるのにほとんど名前が知られていない植物もある。ヤハズソウは後者の代表といえるだろう。春、キャンパス内の植え込みや工事跡地など、人の手が強く加わったところには、無数のヤハズソウの芽生えを見ることが出来る。文学部から北2食堂にかけて、健康管理センターのまわりなどには特に多い。キャンパス内でもっとも多い植物かもしれない。

マメ科の草で、比較的ハギに近いが、草丈はせいぜい30センチどまり。種子は早春から発芽しはじめ、夏の終わりごろ、マメ科に特有の蝶に似たピンク色の花をつける。よく見ればなかなか可憐なのだが、目立たないので、気にとめる人もほとんどいないようだ。秋には種子をつけて枯れてしまう一年生植物である。いかにも雑草的なので、帰化植物と思われるが、れっきとした日本在来の植物で、英名はジャパニーズクロローバーという。漢字で書けば矢筈草。葉の先をちぎってみると残りの部分が、ちょうど弓矢の矢筈のかたちになるのがその名の由来。

家畜の飼料、緑肥として用いられる他に、全草は利尿、解熱、下痢止めの薬になるそうである。若葉は湯通しすれば食べられるらしいが、普段は草むしりの対象にしかなくなってない。

根を引き抜いてみるとたくさん瘤がついている。マメ科に特有な根粒で、根粒バクテリアが共生しており、空中の窒素を固定する。工事跡のような痩せた土地でも育つことができるわけである。この根には全く別の生物も共生している。VA菌根と呼ばれるもので、ある種の菌類との共生体である。普通に見ただけではほとんど気づかないのであるが、特殊な薬品で染めてみると、びっしりと菌類が入り込んでいて、特有の構造をつくっている。VA菌根は、ヤハズソウに限らず、アブラナ科など一部の仲間を除いてほとんどの草の根についている。菌類は植物からエネルギーをもらう代わりに、土の中の栄養分、特にリンの吸収を助けている。一つの雑草の中で、植物自身と根粒バクテリア、それにVA菌根菌が複雑に関係しあっているのだから、自然は奥が深い。

人手が頻繁に加わるような不安定な立地の植物は、小さな種子をつけたり、綿毛がついていたりして、種子を遠くにとばすような仕組みを発達させているものが多い。しかし、ヤハズソウはそうした仕組みをもたず、比較的大きな種子がさやに入ったまま親株の周囲に落ちる。結局、前年の株の周囲に膨大な数の実生が生えることになるが、開花するまでに大きくなるのはわずかで、ほとんどは成長の途中でなくなってしまう。なぜこんな一見無駄なことをしているのか？ 今のところうまい説明はない。

路傍の雑草にも、それぞれの生き方とそれぞれの歴史がある。それに気づけば、食堂までの道のりも結構楽しい。